

会話場面における社会・文化的文脈

——E.ゴフマンのフレーム分析からの検討——

成蹊大学 青山陽子

1 目的・問題の所在

そもそも、会話においては、会話に持ち込まれるコンテクストについての背景的な前提、相互行為上の目的、そして対人的な関係に基づいた間接的な推論に頼りながら、会話者は「ここで起こっていることは何か」に対する解釈の枠組を構築している。その際着目するのがゴフマンの「フレーム」概念である。「フレーム」概念は、動物たちじゃれ合う様子の観察より、「コレハ遊ビダ」とする遊びのフレームが、共有され伝達されていることを示したベイトソンによって提唱され、ゴフマンによって理論的な発展を遂げたといえるが（Goffman1974）、データを用いた会話場面の分析や、そのさらなる検討は、言語人類学分野において活発に行われてきた。

たとえば、ガンパースは、バイリンガルな会話者が用いるコードは、聞き手やその状況、会話のやりとりなど、刻々と移り変わる相互作用における会話行為の意味づけのなかで変化すると指摘し、会話というフレーム構造を動的に把握することを提唱する。また、その一方で、あるコードの使い方が、特定の状況において使われるようになってくると、それは規範化し、安定した用いられ方をする様になることも指摘している（Gumperz1982=2004）。

また、タネンは、進行する会話のやりとりのなかで展開される「文脈化の合図」に関心を示しつつ、診療場面における医師が行うフレームの切り替えを、データに基づいて明らかにしている。小さな女の子を患者として話す場合、その子の母親と話す場合とでは、それぞれ異なるフレームを用いており、その使い分けが「文脈化の合図」になっていたという（Tannen1993）。日本においても、患児の説明を母親に対して行うことが多いため、母親に向かって話す際、男性小児科医の口調が女性的になるということは、臨床現場で観察されるだけでなく、広く一般にも知られている。

これらの知見が示すことは、フレームは、いま・このミクロな会話状況に関与するだけでなく、社会・文化的なマクロな構造とも関係しているという点である。本報告では、インタビューを会話場面として位置づけ、その構造がいかに動的に推移していくのかを分析する。また、会話においては、イディオム的あるいは定型的な表現などの共有されたフレームが、会話の推論にいかに影響を及ぼすのかについても検討を加えたい。

2 方法・考察

分析で用いる枠組み（「フレーム」「フッティング」「産出フォーマット」「コード・スイッチング」など）を簡単に概観したのち、具体的なデータを用いて、報告者が行ったインタビュー場面について検討する。

文献

Goffman, E.,1974,Frame analysis: An essay on the organization of experience., MA: Northeastern University Press.

——1981,Forms of talk. Philadelphia, PA: University of Pennsylvania Press.

Gumperz,J.,ed.,1982,Discourse strategies, Cambridge: Cambridge University Press. (井上逸兵・出原健一・花崎美紀・荒木瑞夫・多々良直弘 2004『認知と相互行為の社会言語学—ディスコース・ストラテジー』松柏社)

Tannen, D.,ed.,1993, Framing in discourse, NY: Oxford University Press.